



## 理解・練習・コミュニケーションの 3領域を意識した授業

新里 眞男 (関西外国語大学教授)

**英**語教育では、input, intake, output という3段階の指導法がある。これらの語は英語教師によって違った解釈があり、授業改善を行うには有効に機能していないと思われる。例えば、intake は文型・文法に関するパターン・プラクティスや音読を意味することが多い。中にはoutput に音読を含める人もいる。これでは音読が授業の最終目的となり、コミュニケーション能力育成のための授業を構想できなくなる。

そこで、私は標題に示した「理解」、「練習」、「コミュニケーション」の3つの領域を指導の指針としている。「理解」では、音声、語彙、文法・文構造、パラグラフなど言語事象そのものの用法などの理解や、テキストの理解を意味する。「練習」では、言語項目の使用上の意味と場面を意識しながら、それらを自動化するためにくり返し使ってみることを意味する。「コミュニケーション」では、現実の言語使用場面で言語項目を自分のメッセージの伝達・やりとりのために実際に使ってみることを意味する。

英語の指導場면을以上の3つの領域に画然と分けることは難しいが、従来のinput, intake, output の3段階よりは授業運営の指針になる。まず、音読は基本的に「練習」の領域に入る。これは音読が基本的には自分のメッセージを表現したり伝えたりする活動ではないからである。また、input ではなく「理解」なので、理解のないinput は無意味であることを明示できる。そして「コミュニケーション」は、生徒が自分の持つ情報、気持ち、考えを英語で表明したり伝え合ったりすることを明確に示している。

「理解」、「練習」、「コミュニケーション」は学習段階を示すものではなく、教師の判断によって相互に行き来できるものである。コミュニケーション活動がうまく成立しない場合には、適宜「理解」「練習」の領域に戻ればよいのである。導入でまずかんたんなコミュニケーション活動を行ってもよいのである。このように考えることで、コミュニケーション能力の育成を目指した授業の組立てがいくらかでも改善されたと考える。

海外の理論をただ受け入れるだけでなく、授業を改善するために必要なものは何かを考えるべきである。



大塚 謙二 (北海道有珠郡壮瞥町立壮瞥中学校教諭)

# デジタル・アナログそれぞれのよさを生かした教材の活用

**私**が現在の勤務校に転勤してきたとき、すでにデジタル教科書が導入されていた。紙のフラッシュカード練習が得意だった私は、少し批判的にデジタル教科書を使い始めた。元々ウォームアップや導入で自作のデジタル教材は使っていたので嫌いなわけではなかった。以来4年間使ってみたが、デジタル教科書によって生徒たちの集中力を高め、維持できることと、その手軽さに驚いた。デジタル教科書とカードやチャート類の両方を所有する恵まれた学校はあまりないと思われるが、教師の授業方法を考慮し、生徒にメリットが多く、各学校の規模で無理なく導入できるほうを選択するとよいだろう。

アナログのメリットは、事前準備の必要や機械トラブルもなく機動性がよく、40人学級でも生徒が見づらいということはない。デジタルのメリットは、画像や動画を手軽に見せられ、板書の代わりに画面を復習のために何度でも提示することで生徒の興味を高めたり、定着を図ることができる。同じことをアナログでできないことはないが、写真や本文を大きく拡大して提示するにはコストも時間もかかってしまう。しかし、デジタルの弱点もある。40人学級の場合、50インチのテレビではうしろの席の生徒には見えづらいことがある。デジタル教科書には拡大表示機能をつけて、その弱点も克服はできているが、教室に大型テレビや電子黒板がない学校では毎時間プロジェクターやスピーカーを授業前にセッティングするのは大変だ。

## ■ 新出語句の練習

新出語句の練習は、紙のフラッシュカードの場合、生徒の定着度に合わせて速度を調整したり、途中でひとつの単語だけを何度も自在にくり返したりすることができる。一方、デジタルの場合は、簡単に文

字とネイティブの発音を同時に提示できるメリットがある。また、提示方法も英語か日本語のみ、日本語→英語、英語→日本語を選択することができ、速度調節も自由なので飽きさせずに反復練習ができる。さらに、紙のカードのように事前に準備する必要や片付け忘れがないので1人で全学年を教える場合は特に便利だ。

## ■ 音声 CD とデジタル教科書の音声の違い

例えば、音声を聞かせる場合、デジタル教科書なら必ずコンピュータ画面を見ながら操作するので、ノートパソコンを使う場合を除いて生徒にスクリーンの本文や写真が見えてしまう。しかし、音声 CD の場合、音声だけに集中させて聞かせることができるし、音声 CD にはデジタル教科書にはない、新出語句チャンツ、スラッシュリーディングなど色々な音声を用意されているので活動の幅を広げられる。

## ■ 本文の扱い方

本文の扱い方については、デジタル教科書を使う場合と CD やカード類を使う場合では授業の進め方そのものが違って来る。要するに、大きな画面でひとつの教科書を全員で共有して見ている場合と各個人がそれぞれの教科書を見ている場合では、自然と指導方法や活動に変化が出てくるのだ。

例えば、教科書本文で「この代名詞 them は具体的に何を指していますか」という質問をしたとする。生徒が各自で持っている教科書の場合、まず、その単語 (them) を探す作業をしなければならない。すぐに見つけられない生徒がかなりいることはご承知の通りである。一方、デジタル教科書の場合、them の位置が教師の指先にあり一目瞭然なので、すぐに答えを考え始めることができる。このように、デジタル教科

書には無駄な時間がなくなるというメリットがある。

さらに、音読練習でもその強みが発揮される。カラオケの歌詞を示す画面のように、音声に合わせて本文の色が変わるので、どこを読んでいるのかわかりやすく、英語学習や文字認識が苦手な生徒にとっても音読練習がしやすい。実際に私が教えていた数名の生徒は、2年生からデジタル教科書を使い始めると、音読練習がしやすくなり英語が読めるようになったと喜んでた。

## ■ デジタル教科書で新しい授業展開を!

デジタル教科書には紙の教科書ではできなかった教科書本文やその訳を瞬時に表示させる機能がある。この機能を使えば停滞しやすい本文の指導を一変させることができる。例えば、音読練習前にボタンひとつで訳を表示し、ペアの生徒に登場人物になりきって訳を読ませる。次に、そのまま気持ちを込めて英文を音読させると楽しく感情のこもった音読練習ができ、内容を再確認する時間を省ける。

また、一般的に内容理解から始まる本文の扱いでは、英文を隠して訳だけを表示させると output 中心に進めることができる。新出語句を練習したあとは生徒全員で本文の日本語訳を見ながら英文を予想して発話させる。すると生徒は正しい英文は何なのか気になるようになる。そのときに本文の英文を表示することで生徒に気づきや発見が生まれ、意欲的に取り組むことができるようになる。このようにすれば、生徒が知りたいときに英文を読める場面を意図的に作り出すことができ、生徒が作ったそのほかの英語表現についても触れることができる。このように、output 中心に本文を学習すれば、内容把握から音読練習に進む従来の流れよりも短時間で英文を読めるようにすることができる。またそれだけでなく、英作文の活動も含まれるので、語順の特性

や構造を理解しながら暗唱できるようになる。比較的短い文の多い1年生にはこの方法が適している。

また、英文理解については、英文を見せながら教師がチャンクで切って読んで、生徒が訳したり、または逆に、教師がチャンクごとの訳を言って、生徒がその部分の英語を音読したりすると、ネイティブのように自然と英文を前から順番に意味をつないで理解していけるようになる。これに慣れてくると読み取りだけでなく、リスニングでも理解しやすくなる。このように学習して、スラスラ意味が理解できるようになるまでくり返し、そして、英文を訳さないで本文の内容や状況をイメージしながら英語を英語で理解するトレーニングにつなげることが望ましい。このように、紙の教科書だけで学習していた頃にはできなかったことが、ICTを活用することにより、新しい学びを創り出すことができるようになった。

## ■ 自律的学習者を育てる側面では

デジタル教科書は便利だが、教師が気をつけなければスプーン・フィーディング的指導になり過ぎ、生徒が自ら調べ、発見し、気づき、考え、自律的に行動し学習するのを阻害する可能性もある。また、教師も ICT なしでは授業ができなくなるという不安を感じるようになるかもしれない。デジタル教科書にはそのような危険性もあることを認識してほしい。音声だけに集中させるには CD の方が優れている。紙媒体の教科書にもよさがあり、紙芝居の活動もピクチャーチャートの方がより効果的であり、便利だ。単語・語句練習でもフラッシュカードの自由度はやはりデジタルより優れている。どちらでも同じように授業ができる教師であり、どちらでも同じように学び、自律的学習者になれるように生徒を育てるためには、デジタル・アナログ両方のよさをよく理解する必要がある。



# 自律的学習者を育成する 活用法

胡子 美由紀 (広島県広島市立井口中学校教諭)

## 1. はじめに

**近**年学校での ICT 活用教育が進められる中で、英語授業においてもデジタル教材の使用が増え、デジタル教科書の導入が進んでいる。デジタル教科書のメリットは主に「授業をビジュアル化・焦点化・効率化・協働化」できることである。本文や設問を拡大提示することができるので情報を共有しやすく、生徒の意識をデジタル教科書に集中させ興味を喚起することができる。全員で同じ画面を見ているので、紙媒体を使用していると出現する迷子がいなくなる。特に支援を要する生徒にとっては情報がビジュアル化されていることは学びやすさにつながる。ともすると便利さと目先の華やかさが注目されがちであるが、デジタル教科書を使用し確実に発信力を培うベースを身につけさせ、自律的学習者を育てていきたい。以下に私の授業実践を紹介する。

## 2. 授業実践 (1年生 Program 10)

### ① 内容のブレンストーミング

まず本文に関わる内容のブレンストーミングをペアまたはグループで行う。全体でシェアしたあとに、デジタル教科書の絵を見せ、本文の内容を推測させる。絵を先に見せて話を想像させたり、Picture Describing を行ったりすることもある。こうした活動でトピックについてスキーマを活性化させておくこと次に導入の際の内容理解に役立つ。デジタル教科書は場所をとらずに瞬時にセクションごとの絵をすべて並べて表示したり1枚表示にしたりすることも可能だ。本文の Oral Introduction にも使え、生徒の実態に応じて活動を選択しやすい。SUNSHINE 1 の Program 10 には本文内容を想起しやすいように動画も収録されている。デジタル教科書を開くと動画マークが出てくるのでクリックす

るだけでかんたんに再生可能だ。英語字幕・日本語字幕・字幕なしと選択できる。本校の生徒はビデオを見た際に、国立航空宇宙博物館に展示されている爆撃機エノラ・ゲイが映ったとき、“Oh, Enola Gay! A-bomb!” と言っていた。

### ② リスニングによる本文内容の導入

本文の音声再生機能を使用して音声を聞く。初めて聞いた本文が何%理解できたかを確認させる。デジタル教科書の通常ページは再生するとき本文が見えてしまうので、私は目を閉じさせて音声のみを聞かせるようにしている。絵を見せて導入したい場合は、ピクチャーチャート画面にして文表示を OFF にすると英語のみを聞かせることができる。速度調整が3段階あるので、速度を変えることも可能だ。

### ③ 音読

音読の際はデジタル教科書の機能を活用して内容理解を図る。教師が必要な機能を取捨選択できることが魅力だ。音読機能としては、「読み上げ文字消去機能」、「単語選択マスク機能」、「キャラクター選択機能」、「ピクチャーチャート機能」、「フラッシュカード機能」がある。1文再生や文中の1単語、部分再生、日英単語練習、必要に応じて意味も全文またはチャンク単位で示すことができる。活動形態として個人、ペアやグループを活用し、協働的な学びを仕組んでいくと生徒は意欲的に取り組む。パワーポイントなどで同様の活動をすることもできるが、デジタル教科書には標準装備されているので準備する労力と時間を短縮することができる。

以下が私の授業で通常行っている音読の手順だ。ストロベリー (1語)、スラッシュ、リズム、タイム、チェンジ、30秒 (カウントダウンタイマー使用)、ツッコミ読みなどを行ったあとにデジタル教科書を使う。

「読み上げ文字消去機能」では、速度を上げてデジタル教科書と競わせると生徒のやる気に火がつく。

生徒から必ずリクエストがあるのが「単語選択マスク機能」だ。選択した単語を隠すことができるので、単なる音読だけでなく暗唱につなげるステップとして行う。生徒が単語や英文をすぐに言うことができないときは、隠した単語をクリックして文字表示をする。上に再生ボタンが出てくるので、それをクリックすると音声再生もできる。隠したものをそのままにして2~3分、グループでジェスチャーリーディングをする時間をとると、より内容の理解を深めることができる。文字を表示するときは文字と音、文字を非表示にするときは音と意味のつながりを強固にすることが狙いだ。

本文が対話の場合は「キャラクター選択機能」を使用するとよい。

時間に余裕があればニュースキャスター読みやアフレコ読みも効果的だ。臨場感のある音読をさせると生徒は自分たちからどンドン声を出して読むようになる。ここまでで生徒たちは20回以上本文を音読することとなる。仕上げは、2回目の30秒読みで1回目より読むことができる英文が増えたかと、タイム読みで何秒で読むことができたかを確認する。最後に再度目を閉じてリスニングをさせ、理解度が何%か記入させる。ほとんどの生徒は理解度が上がっている。声を出し、音の連結などを発音練習を通じて、英文を言うことができるようになっていくからだ。人は自分が声に出して言えないことは聞こえてこない。

教科書左ページの「Listen」も練習して、聞きっぱなしにするのではなく、正答がよくなかった設問はさっとスクリプトで確認させてみるとよい。こういう体験をスモールステップでくり返すことで、生

徒は学び方を身につけていく。

### ④ アウトプット

本課では最後のアウトプットとして Retelling を行った。導入の際に使用した絵を再度提示し、できるだけ自分のことばで本文内容を再生する。ペアやグループで仲間の Retelling を聞くと、「こんな風に言えばよかった」、「自分だったらこう言った」などの気づき生まれ、次のアウトプットへのモチベーションとなる。1年生のうちに学んだことを、絵を使いながらも自分のことばで表現する力をつけておきたい。そのあとで、自分が言ったこととそのとき言えなかったことを加えて書き起こし、次時にクラスでシェアした。全員が教室内を歩き回り、仲間の書き起こしたものを読む。いいと思ったものにサインと短い感想を書く。

本文が対話の場合には「そのまま Skit」をやる場面や登場人物の心情も考えたパフォーマンスができる。本文を少し変えたり前後に英文を付け加えたりするだけでもユニークな Skit を作ることができる。私は生徒にオリジナリティを出させたいので、場面設定だけを行い、自由な発想で Skit をさせることが多い。

## 3. 最後に

デジタル教科書の効果的な活用によって、授業デザインのバリエーションが増え、4技能を駆使したダイナミックな授業に変わっていく。さらに、生徒たちは学びを深め自主的に学んでいくようになるだろう。

# 新しい デジタル教科書 6つのポイント

SUNSHINE のデジタル教科書では、教科書の紙面構成の流れをそのまま掲示しています。学習内容が一目瞭然になっているため、生徒は学習している箇所をすぐに、手元の教科書でも確認できます。ここでは、新しい 28 年度版デジタル教科書の活用すべき機能を 6 つ紹介します。

## ① 豊富なカラオケ機能



英語の音声に合わせた通常のカラオケ機能のほかに、英語をチャンクごとに読んだあとに意味をとらえさせる「チャンク再生」があります。Read and Look-up に使える「文字消去機能」など、用途に合わせてお選びいただけます。



## ② リテリング

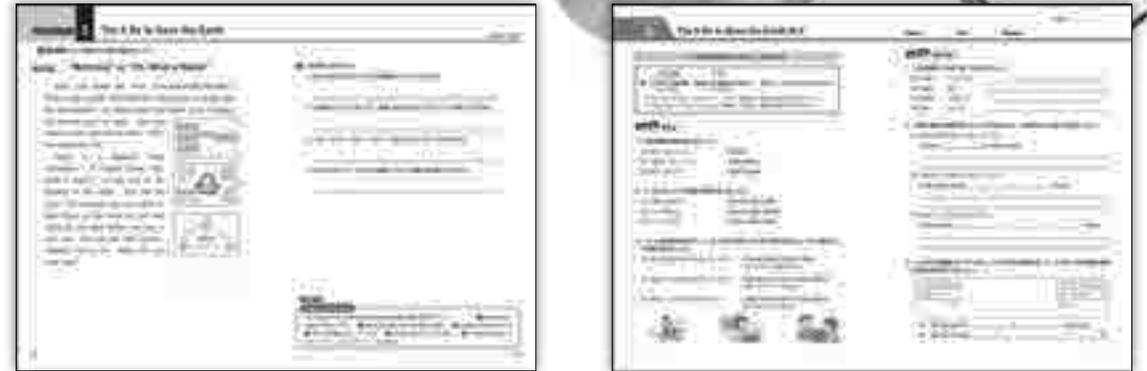
学んだ学習内容を生徒が自ら選んだキーワードとイラストでリテリング活動ができます。教科書の英文を頭の中に内在化させる指導にお使いいただけます。

## ③ カスタムフラッシュカード

既習単語を選んでフラッシュカードを追加できる機能です。3 年生の授業で 1、2 年生で学んだ単語が定着していないと感じたときなど、生徒の実態に応じた語彙指導ができます。



## ④ ワークシート



本文に関連した読みものを掲載したワークシートと、基礎基本の文法を徹底的にトレーニングする文法学習用ワークシートの 2 種類を用意しました。授業や自宅学習に取り入れることで、全体の学力を底上げします。

## ⑤ 文法アニメ



学んだ文法事項をアニメーションで視覚的に理解する機能です。Basic Dialog 全編に配されているので、学年をこえてふり返ることもできます。3 年間を見通した SUNSHINE だからできる機能です。

## ⑥ 豊富な映像



すべての課にそれぞれの題材に即した場面映像や資料映像を用意しました。授業の導入などに、目と耳を通して知的好奇心をくすぐる映像教材を使うことで、生徒の興味・関心や意欲をかき立てます。



田村 岳充 (宇都宮大学教育学部附属中学校教諭)

## 本番までのプロセスにアレンジを! ワンランクアップ のための一工夫

### 1. My Project を効果的に 活用するための土台

生徒が My Project でいきいきとパフォーマンスできるようにするためには、My Project 期間中だけ懸命に準備をし、パフォーマンスをさせるだけでは難しい。年度当初から、1年後の Project で生徒にどんなことができるようになってほしいのか、また、そのためのリハーサルとなる各学期末の My Project で生徒にどんな経験を積ませておけばいいのか、教師が年間の見通しを俯瞰的に持って、指導を展開していくことがとても大切になってくる。

例えば3年生について具体的に考えてみよう。

#### ◇ My Project 9 に向けた Project の流れ



上の図で示したように、学年末には、生徒一人ひとりが My Project 9 で「自分の将来の夢」についてまとまった量の英文を書き、クラスメートを前に発表をすることになる。その際、生徒一人ひとり人がどんなことができるようになっていなければならないのかを事前に洗い出してみるから始めたい。そうすると、日頃から生徒にどんなことを意識させ、挑戦させるべきかが見えてくる。

- 人前でどのびと発表できる
- 聞き手を意識しながら発表できる
- 発表原稿を構想し、英作文できる

こうしたことができる生徒を育てるために、日頃から次のようなことを意識していく。

- 人前で発表する機会をくり返し設定する
- 発表のためのモデルをくり返し設定する

### ●英作文をする機会をくり返し設定する

My Project で必要となるような言語材料や語彙(知識)が身につく、スピーチ原稿として英作文をする中で活用でき、実際に発表するという技能として使えるようになるまでには十分な時間が必要である。だからこそ、日頃の授業で、失敗を許容しつつ、活用する機会をくり返し与え、小さなリハーサル体験をさせていくが必要になる。短期集中の突貫工事ではなく、1年をかけて生徒に Try and Error の機会を設定し、彼らに効果的なフィードバックを与えていきたい。

以下、ここで述べた考え方を土台にしつつ、My Project の本番、スピーチ発表までのプロセスにアレンジを加え、パフォーマンスレベルをワンランクアップさせるための工夫を紹介する。

### 2. 生徒の心を動かすガイダンス

本校では、年度当初の授業開きの際、ガイダンスの一環として年度末に取り組む My Project について生徒に紹介している。具体的には、1学年上の先輩のパフォーマンスの様子を動画で視聴させる。「百聞は一見に如かず」である。身近な先輩が楽しみながらスピーチをしている姿を見るだけで、生徒たちは動画に引き込まれていく。そして、視聴後、先輩のスピーチを超えようと呼びかけることにしている。

本校では、1,2年生でも、年間のゴールに向かって My Project を中心に置いた学習を展開している。そのため、3年生は2年間を通して、原稿作成のたいへんさ、それを暗唱して発表できるまでの苦労を体感的に学んでいる。身近な先輩が輝いている姿を動画で視聴することで、「1年間しっかり学ばなければいけない。でも、先輩のようになりたいからがんばろう」と前向きになり、心が動くこととなる。教師がどれだけ熱心にその意義をことばで説明しても、先輩1人のスピーチを視聴することには敵わない。ぜひ実践してみてもはどうだろうか。

### 3. 日頃の授業で意識すべきこと

#### (1) 人前で発表する経験

人前で発表することに慣れるために、日頃からク

ラスメートの前で発表する経験を積み重ねさせたい。コミュニケーション活動で行っているペアでの対話をデモンストレーションさせるなど、直接スピーチにかかわらない場面でも、小さなリハーサルを行わせている。また、教科書の読み物教材を使った群読も効果がある。4人の小グループで役割分担をしながら、輪唱など、独自の工夫を凝らして読み聞かせを行う活動である。暗唱する必要がない分、スピーチよりも難易度が低いが、クラスメートの前で発表する緊張感を味わうことができる。

#### (2) 聞き手への意識(相手意識)

聞き手への意識を高めるために、コミュニケーション活動におけるペアでの対話活動で、対話の様子を別のペアにタブレットで撮影してもらい、事後に視聴し、相互評価する場面を設けている。相手にとって聞きやすく、理解できる発音、スピード、間などが意識され、実践されているか、また適切な英語を話しているかなどを協働的にふり返ることで、次の機会に改善すべきことを明確にさせることができる。



スピーチは、ペアでの対話ほど頻繁に授業で行うことはないが、発表のリハーサルの段階でタブレットにより録画と視聴を行い、クラスメートと相互評価を行っている。

#### (3) 書く力を伸ばす3分ライティング

書く力を伸ばすために、授業の最後に3分間のライティング活動を位置づけている。ペアでの対話活動を行ったあとで、対話の内容をレポートする形で英作文をさせている。一度実際に対話をしたことを書き起こしていくので、ライティングの難易度は下がる。教師は1週間に一度、ライティングの添削を行う。生徒は添削されたコメントを読むことで自分が何を間違えたのかわかる。年間を通して継続的に行うことにより、生徒の書く力が着実に伸びていく。書くことに慣れた生徒は、スピーチの原稿作成に向かっても物怖じしなくなる。

### 4. 自分の学びを客観視させるふり返り

各 My Project の終わりには、ふり返りの時間を取っている。My Project や群読発表会を行ったあとで、各クラスのベストパフォーマンスを視聴する。時間の都合で全員分を視聴することはできないが、動画を視聴しながら自分の発表を重ねることができる。よかったところや課題となっているところは何かを考え、ふり返りをさせている。どんなことができるようになって、まだできていない



ことはどんなことなのかを生徒自身が知ることは大切である。その後の学習で課題を解決

しようと具体的な取り組みができるからである。また、優れたパフォーマンスから、改善のためのヒントを得ることもできる。教師が生徒の課題を口頭で説明しても、実感としてはなかなかつかみにくい。実際に My Project に取り組み、ふり返りを充実させることで、成果と課題を実感できる。

### 5. My Project のカスタマイズ

My Project そのものをカスタマイズすることもひとつの手である。スピーチのアイデア検討、原稿作成、発表リハーサルなど、どの段階でも、くり返し練習を行うことが必要不可欠となる。そこで、My Project に入る前の単元を学習しているときから、10~15分程度の帯学習の形で先取りの時間を確保している。1回ごとの時間は短くとも、生徒たちが家に帰っても、頭の中で構想を巡らせるなど、学習の余韻が残る効果がある。また、スピーチのテーマ設定についてもカスタマイズができる。本校では、所定のテーマ以外にも複数の選択肢を設けている。最後の選択肢は自由とし、生徒が自由に表現する余地を残している。選ぶことはこだわりのつながらる。

本稿で紹介したような、My Project の本番までのプロセスにアレンジを加え、ワンランクアップのための工夫をしてみてもはどうだろうか。



# とっさの一言～こんなとき Do you know?

梅本 龍多 (関西大学初等部教諭)

## 1. はじめに

先生方の中には、海外修学旅行や語学研修等で児童・生徒を海外に引率したご経験をお持ちの方も多くおられるのではないのでしょうか。常に子どもたちの安全を第一に考え、旅行業社の方とも事前に綿密な打ち合わせをし、その結果、子どもたちは有意義で貴重な経験ができたことと思います。

しかし、現地で思いがけないトラブルに見舞われたりして困られたこともあったのではないのでしょうか。もちろん当事者である子どもは、何よりも心細く思ったことでしょう。言いたいことが言えない、言っていることがわからない、こんなことになるならもっと勉強しておけばよかったと。しかし、そもそもトラブルが起きたときに使う英語を事前に教えてもらっていたのでしょうか。

ここでは、海外滞在中、あるいは外国から留学生が来ているときなどに、さまざまな緊急事態が起こった場合を想定して、そこでとっさに対応できる英語表現をいくつかあげてみます。

これらの英語表現は海外に行く予定の子どもたちだけに指導するのではなく、その予定のない子どもに対しても行っておかなければなりません。なぜなら、緊急事態はいつでもどこでどのような状況で起こるか分からないからです。

## 2. これだけは使えるようにになりたい 緊急時に役立つ英語

緊急事態が起こると、どうしても普段の冷静さを失い、パニックに陥ることがあります。そんなときとっさに出てくる英語は簡単であるほうがよいのは言うまでもありません。地震、台風、洪水、落雷などの天災が起こったとき、自分の身を守るだけでなく、友だちや家族も災害の被害から守らなければなりません。ここでは、小学生でも使える表現を紹介します。

### 【地震】

- Earthquake!  
地震だ。
- Don't panic!  
あわてるな。
- Please calm down!  
落ち着いて。
- Don't use the elevator!  
エレベータを使ってはいけません。
- Stay away from the windows!  
窓から離れて。
- Cover your head!  
頭を覆って。
- Go under the tables!  
テーブルの下に入って。
- Tsunami is coming!  
津波が来る。
- Escape to higher ground!  
高台に逃げて。
- Follow me!  
ついてきて。



### 【台風、洪水、落雷】

- Don't go outside! = Stay indoors!  
外に出てはいけません。= 中において。
- Beware of strong winds!  
強風に気をつけて。
- Beware of floods!  
洪水に気をつけて。
- Stay away from trees!  
木から離れて。
- Watch out!  
気をつけて。



### 【火災】

- Fire!  
火事だ。
- Don't go back!  
戻ってはいけません。
- Cover your mouth!  
口を覆いなさい。
- Stay low!  
姿勢を低くして。
- Call 911! (アメリカの場合)  
911に電話して。



### 【盗難】

- Thief!  
泥棒。
- Catch him (her)!  
彼(彼女)を捕まえて。
- My passport is missing!  
パスポートが見当たらない。
- I lost my passport!  
パスポートをなくしました。
- My wallet was stolen!  
財布が盗まれた。



### 【事故】

- Please help me!  
助けてください。
- My leg hurts!  
脚をケガしました。
- Call an ambulance!  
救急車を呼んで。



### 【体調不良】

- I feel sick.  
気分が悪いです。
- I have a fever.  
熱があります。
- I have a headache.  
頭が痛いです。
- I have a stomachache.  
おなかが痛いです。
- I hurt my back.  
背中を痛めました。
- Are you OK?  
大丈夫ですか。



## 3. 効果的な指導法

では、実際にこれらをどのように指導するとよいのかいくつか考えてみましょう。

- 紙芝居やスライドを作成して、それぞれの場面に合った表現を紹介し合う。
- 新聞やインターネットの写真を活用して、状況に合った表現を紹介し合う。
- かんたんな劇を創作して、その場面に合った表現を使ってみせる。

可能であれば、実際に海外で経験したことをもとに新たな表現を加えるなどして、次年度海外に行く子どもたちに発表させるとよいでしょう。

## 4. おわりに

機内での話です。日本語のアナウンスに続き英語のアナウンスがありました。日本の子どもたちは、英語になったとたん話し出し、次第に大きな声になりました。英語で情報を得る人のほうが多いにもかかわらずです。校内放送を英語に変えてみようか、なんて思いました。今の子どもたちには、英語からも情報を得ることに慣れてほしいと思います。

# 「新学期に有効なアクティビティを教えてください!」

おたすけコラム 第①回

おたすけ

## 教室の中に 社会のリアルさを



北海道札幌市立明園中学校教諭 磯 麻耶

**新**学期、何のために英語を勉強するのか子どもたち自身に考えさせるため、こうたずねてみたい。「雪まつりの会場で、ツルツル路面で転倒し動けずにいる外国人を見かけました。英語は通じそう。使えるツールはスマートフォン。さあ、どうする?」近くの病院を検索して道案内? 救急車を呼ぶ? どう説明する? 翻訳アプリに丸投げ? 湧き出るさまざまなアイデアを皆で共有。「日本から出ないから英語は使わない」と断言する生徒に、「受験や就職に有利だから勉強しなさい」とは言いたくない。私たちの暮らしには、地域固有の外国とのつながりがあり、そして、共通言語としての英語がもつ力は大きい。社会のリアルさを教室に持ち込み、社会と子どもたちとをつなぐ接点の場にできればと思う。(転倒した外国人との出会いは、私が実際に経験した出来事です。)

## アクティビティにおける ゲーム性と対話量のバランス



静岡大学教育学部附属浜松中学校教諭 石田 真

**中**学校英語が始まる1年生にはゲーム性が高いものが好まれますが、教員は当然その活動を通して学習事項の理解と定着を求めます。そこでルールを単純化し、英語を使用する機会を多く確保することが、活動を考えるうえでバランス上、重要となってきます。

本稿では Do you like ~? を用い、列の向かい合わせとなったペアで行う活動を紹介します。相手の好きなものを当てる単純な活動ですが、1ターンを40秒、その40秒の中でじゃんけんの勝者のみがたずねることができるという制限を設け、加えて下段に行くほど点数が上がるという偶然性を合わせることで、たくさんたずねて高得点をねらいたい、という気持ちを喚起します。列ごとに交代し、5ターン行います。この活動で生徒たちは限られた時間の中で、英語を用いてたずねることそのものを楽しんでいる様子でした。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
8	7	6	5	4	3	2	1	0	0
7	6	5	4	3	2	1	0	0	0
6	5	4	3	2	1	0	0	0	0
5	4	3	2	1	0	0	0	0	0
4	3	2	1	0	0	0	0	0	0
3	2	1	0	0	0	0	0	0	0
2	1	0	0	0	0	0	0	0	0
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ワークシート例

投稿

## 『Discovery』<sup>(開隆堂)</sup>を使った 「アクティブ・ラーニング」



福岡県立須恵高校教諭 高瀬 博

**従**来のような知識伝達中心の授業では、主体的に考える力を持った人材は育たないという考えから注目を集めている教授法が「アクティブ・ラーニング」である。教師が学生に一方的に知識を教授する講義型ではなく、学習者が主体的に問題を発見し、答えを見出していく能動的な学習方法のことである。

それでは、具体的には、どのような活動が効果的なのだろうか。開隆堂の Discovery I, Discovery II を使った活動例を挙げながら考えていくことにしよう。

**【例題 1】** 次の童謡の下線部を日本語にしよう。  
「昔、昔、浦島は、助けた亀に連れられて竜宮城  
に来てみれば、絵にも描けない美しさ」

**【解説】** Discovery I の Lesson 3 (p.27) に出てくる動物に追加して、「亀」を英語で何と言うかを調べさせる。「もしもし亀よ、亀さんよ!」の亀と同じかな? と問いかける。その後、英訳のポイントの2つめ「助ける」について考えさせる。波線部の英訳は Discovery I Lesson 7 (p.74) の beyond ~ を使うとヒントを出すのも有効だ。Lesson 5 には亀や鳩が出てくるので、dove と pigeon の違いを調べさせたり、Lesson 6 (p.59) や Discovery II の Lesson 5 (p.59) にはペンギンが出てくるので、first penguin の意味を調べさせたりして、「動物」「鳥」を含む慣用表現について興味を持たせるのも効果的だ。実際に生徒に「辞書」を引く時間を取って調べさせたら「へえ、おもしろい」という声があちこちから聞こえてきた。「これからの指導法はこれだ!」と実感した瞬間であった。

**【例題 2】** 次の日本語を英語で表現しなさい。

1. 日本サッカー協会
2. 国際サッカー連盟

**【解説】** Discovery I, Lesson 4 (p.38 ~) でキーワードとなるのは「サッカー」に関する知識。また、Discovery II では Reading 2 (p.138 ~) にラグビーの話も取り入れているので、これを機会に両者の違いなどを、各部活の部員に発表してもらうのも意義があると思う。また、「リスペクトプロジェクト」についても触れると大切な「思いやりの心」を育てることができるはずだ。

**【例題 3】** 次の日本語を英語にしよう。

1. ニューゼーランドはイギリス連邦に属している。
2. アルジェリアはフランスに属していた。

**【解説】** Discovery I (p.39) にはいくつかの国名が載っている。導入として上の例題を解かせてみた。時制の違いに過ぎないと思う生徒が多かったので、「歴史的背景」を考えるようにとヒントを与えたところ、「なるほど、英語って、奥が深いんだなあ」と感動していた。

**【解答例】**

1. Australia is a member of the Commonwealth.
2. Morocco was once under the rule of France.

**◆ 結論**

これまで、「すぐに答えを生徒に提示し、多くの知識を詰め込んでくれる先生」が、「良い教師」の定義だったかもしれない。しかし、これからは、「多種多様な問題に直面したとき、自ら解決できる力を身につけてくれる先生」「考えるポイントを教えてくれる先生」が、本当によい教師と言える時代になりつつある。そのような教師になるためには、「生徒は自ら進んで学びなさい。教師は生徒の学びに協力するから」と上から目線で (in a patronizing way) の「協働」ではなく、「教師も生徒と共に学ぼう」とする「共働」の精神で取り組んでいく必要があると思う。

# 「聞く」ことを大切にする教育

高田 智子 (明海大学教授)

4技能をバランスよく指導することが求められている。きっとそのように指導されているのだろうが、私が見る授業DVDや公開授業はなぜか話したり書いたりする活動が多く、聞く活動を中心とした授業はほとんどない。聞くことは受動的な技能ということになっている。それはある意味で正しいが、聞いて理解するには積極的に意識を働かせる必要があるから、完全に受動的とも言えないように思う。

もう30年近く前になるが、忘れられない光景がある。ジョン・F・ケネディの生家があるボストン郊外の閑静な町で、小学校を訪問した。全校の子どもたち、といっても100人にも満たないが、フロアに座って校長先生のお話を聞いていた。5年生の女の子が地元の暗唱コンテストでシェイクスピアの一節を暗唱し、優勝したという紹介があった。校長先生に呼ばれてその女の子が前に立ち、その一節を披露した。どのお芝居だったか今ではすっかり忘れてしまったけれど、表情豊かで流れるようなリズムに皆が聞き惚れた。子どもたちの拍手が鳴りやみ再び校長先生が立たれ、賞賛した。その女の子ではなく、聞いていた子どもたちをである。「シェイクスピアのお芝居は昔の英語で書かれています。1年生や2年生には難しかったかもしれませんが、でも最後まで熱心に聞いていましたね。見事でした。」自己主張が強いと言われるアメリカ人が、聞くことをこれほど大切にしている。このことは、流れるようなシェイクスピアのリズムとともに、私の心に深く刻まれた。

時は少し下って、ニューヨークで博士論文に取り組んでいたときのことである。概してせっかちなニューヨーカーは話すスピードが速く、しかも相手が言い終わるのを待ちきれないように話し始める。けれど私が在籍していた英語教育専攻の教授たちは英語を母語としない学生に慣れていて、私はニューヨークスタイルの圏外にいた。実際、教室には訛り

のある英語があふれていたし、そもそも教授自身の母語がヘブライ語だったり中国語だったりした。おかげで何とか遅れをとらずに勉強していたのだが、いよいよプロポーザルを執筆する段階になって、そうもいかなかった。プロポーザルはいわば論文の青写真であり、その指導は実に徹底していた。社会科学系のさまざまな学科から学生が集まるクラスで、毎回2~3名のプロポーザルが組上に載せられ、気鋭の研究者の卵たちが多様な角度から吟味する。この議論がまさにニューヨークスタイルだった。私は温室から吹きさらしの戸外に出された。

自分の番になったとき、私はあらかじめ用意した3枚ほどの原稿を手にし話し始めた。3行目にさしかかると教授に止められた。教授の求めた内容ではないというのである。「それはこれから述べようとしているのです」と言いかけると、再び止められた。私は意気消沈して口をつぐみ、時をおかず次の学生の番になった。私は聞いてもらえない無念さと恥ずかしさで、その後の授業がほとんど耳に入らなかった。簡潔に発言できなかった自分に非があると、必死で言い聞かせる自分がいっそう情けなかった。

数日後、その教授から手紙が届いた(メールの黎明期のことである)。驚いたことに、私の発言を最後まで聞かなかったことを詫言、もう一度機会を与えたいと書かれていた。後日、あの日の教授の態度に憤慨したクラスメートが、私に代わって抗議してくれたことを知った。救われた思いがした。

ことばは人である。聞くことは、話し手と向き合うことである。だから個を重んじる社会では聞くことを大切にし、そういう教育をする。私を代弁してくれたクラスメートも、彼の話に耳を傾けた教授も、かつて私がボストン郊外の小学校で垣間見たような教育を受けたのかもしれない。発信力を育成するなら、発信されたことばを受容する力と心の育成も忘れてはならないと思う。

**投稿を歓迎します** 英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。掲載号につきましては、原稿到着時に決めさせていただきます。規定は右記のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

① 22字詰×72字以内(本文分量)

② 二重投稿はご遠慮ください。

③ 採用分には薄謝を進呈いたします。